

審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 北山 敏秀

論文題目

戦後思想史のなかの大江健三郎——「評論」と「小説」の相互関係に注目して——

北山敏秀氏の博士学位請求論文『戦後思想史のなかの大江健三郎——「評論」と「小説」の相互関係に注目して——』は、一九五〇年代後半から一九七〇年頃までに発表された大江健三郎の小説と評論を分析の対象とし、それらの相互関係に留意し、この時期の大江の文学的言説をより総対的に戦後思想の問題としてとらえ直している。

本論文の方法的独自性は、これまで小説を論じるための二次的な資料の位置に留められてきた評論を、小説と同じように同時代の社会的思想的状況の中で構築された言説として位置づけ、小説の物語世界を作り上げていく過程と評論の内容や文体との相互関係を論じたところにある。

第一部「『世代』論の運動」では、小説家として大江健三郎がデビューした一九五七年から「六〇年安保闘争」前後の発言に焦点を絞り、自らを「戦後世代」と位置づけた意味について論じている。

第一章では一九四五年八月一五日の昭和天皇の玉音放送について大江がどのように語って来たかを明らかにし、第二章では橋川文三の「戦争体験論」を軸にしながら、大江の自己規定の妥当性を論じている。第三章では、一九五八年一月『文学界』に発表された『飼育』を中心に、大江が「戦争」と自分との関係性をどのように認識しようとしたかについて解明されている。

第二部「〈周縁〉から問う」では、障害を持つ子どもの誕生と広島の実験被爆者との出会いが重なる中で、高度経済成長下の日本において〈周縁〉化される人々に、大江がどのような目を向け、彼ら彼女らをいかなる言葉で表現して来たかが問題にされている。

第四章では、障害を持つ子どもと共生する父親を描く後の大江文学の一つの基調の出発点となる『個人的な体験』（新潮社、一九六四年八月）を、同時代における成長発展だけを主要価値とした「人づくり政策」との対抗において分析している。第五章では『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、一九六五年六月）を中心に、被爆者一人ひとりの個別的な生と死を、「被爆者」として一括りにしない描き方を追求する大江の姿勢が明らかにされていく。そして第六章では、「六〇年安保闘争」で精神的な傷を負った者たちが、地方において民衆運動の在り方を問い直そうとする過程を、『万延元年のフットボール』（講談社、一九六七年九月）で明らかにしている。

第三部「連続する「天皇制」」では大江の小説における、「玉音放送」を境界とする、戦

前・戦中と戦後にかけての「天皇制」の連続と非連続の問題が論じられている。

第七章では一九六〇年一〇月一二日、日比谷公会堂で行われた三党首立会演説会で日本社会党委員長浅沼稻次郎を刺殺した山口二矢をモデルとした「セヴンティーン」（「文学界」一九六一年一月）と「政治少年死す」（「文学界」一九六一年二月）が、大江の側の共感の可能性も含めて、同時代状況とのかかわりで分析されている。第八章では「本土決戦」を避けるための「捨て石」とされた沖縄と正面から向かい合う大江の姿勢を、『沖縄ノート』（岩波新書）を中心に論じている。そして第九章では、三島由紀夫割腹自殺によって示された戦後日本社会に内在する「天皇制」の危険性が「みづから我が涙をぬぐいたまう日」（「群像」一九七一年一〇月）が論じられている。

審査の過程で審査委員からは、論文内で繰り返し使用される「民主主義」という概念が曖昧であること、第一部から二部までと、三部との内容的なつながりが十分でないこと、「戦後世代」という概念が曖昧であること、北山氏の分析が対象とした小説や批評の文章の強度と対応しているのかどうか、という批判がなされた。また、小説と批評とを合わせて論じたことによって、同時代的な政治状況とのかかわりは鮮明になったものの、大江健三郎の小説的表現の強度についての言及が不十分だったのではないかという指摘もなされた。

しかし、北山氏の論文は、大江健三郎の文学的出発の時から的小説と批評的言説を、同じ文学的水準と強度をもつ言語表現としてとらえ直し、相互の密接な問題意識の共通化と、同時代の社会的状況への関与の相互性を明らかにしたことは高く評価された。

とりわけ大江健三郎という作家が「戦後民主主義」という言葉を強く意識化して、自らの文学的活動を行って来たことはかなりこの論文によって明確になったと評価された。北山氏の論文は、評論と小説の相互関係を意識的に結合したことによって大江の言説の本質を明らかにするものであるといずれの審査委員も評価した。本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。